

雲解像大気モデル (CReSS) を用いた局地的短時間豪雨のシミュレーション

若月泰孝（筑波大学）

CReSS は名古屋大学で開発された雲や降水を表現できる大気モデルである。数千キロのスケールをもつ大気現象や竜巻スケールの現象までを表現できる能力をもち、気象予測や大気現象の理解にとって、このモデルを用いたシミュレーションは非常に有効である。

近年、台風やゲリラ豪雨、突風などの気象災害が注目を集め、また地球温暖化に伴う豪雨頻度増加予測とも関連し、減災を念頭に置いた予測技術の高度化は非常に重要な研究テーマと位置づけられている。我々の研究グループは、このような災害に結びつく降水現象を、様々なアプローチから研究を進めている。いずれのアプローチも CReSS によるシミュレーションは重要な役割を果たしている。発表は、これらのアプローチと其中でのシミュレーションの位置づけについて紹介する。

アプローチの1つ目は、台風現象の予測と理解についてで、平成23年度に発生した台風12号などを例に紹介する。2つ目は局地的短時間豪雨とその予測技術開発である。関東で発生した現象のシミュレーションを例に紹介すると共に、それらを予測するための基礎的な技術開発について紹介する。3つ目に、アンサンブル予測について、そのアプローチの考え方を紹介する。これらの研究は、筑波大学と名古屋大学地球水循環研究センターとの共同研究とリンクさせる形で進めている。